

夫の腎臓と、笑うわたし

両角 晴香

高校の同級生と7年ぶりに再会した。1980年生まれの我々は、40代になってはじめて顔を合わせる。メンバーの一人は、「さっちゃん」。

さっちゃんとは高校時代に一度も話をしたことがなかった。大学生になって急に仲良くなり、恋のこと、夢のこと、青臭いことはすべて打ち明けてきた特別な友人だ。

けれども、7年ぶりの再会とあって、どこかぎこちない。

さっちゃんといえば、腎臓が悪い私が入院した時にお見舞いにきてくれた人。学生時代に音楽活動をしてきた私が京都でライブをすることになり不安そうにしていると、京都まで同行してくれたのもさっちゃんだった。後に、京都の前日にお父様が倒れたことを私に隠して京都に来てくれたことを知り、何度も何度も謝ったのは切ない思い出だ。(お父様は無事回復しました)

楽しい思い出も苦い思い出もあるさっちゃんと40代になり再会。なのに、ぎくしゃくしていることがもどかしかった。

この7年間、私もさっちゃんも心境の変化があったせいだろう。

私は夫から腎臓を一つ分けてもらう夫婦間腎臓移植を受け、25年ぶりに持病を手放すことができた。

笑うとキムタクに似ているのにずっと独り身だったさっちゃんは、今年、地元広島的女性と結婚して家庭を持った。聞けば、出会って3ヶ月のスピード婚で、お相手は歯科医院を営む女医さんとな。あのシャイなさっちゃんが惚れ込んだ女性としあわせな家庭を築いている。本当によかったと思った。

しかし、会話は盛り上がらなかった。ぎこちないのは、話し言葉のせいもあった。私は東京に暮らし、さっちゃんも海外を転々としていたせいかな、広島弁がスツと出てこない。

もたもたしていると2時間の会食は終了。お会計を、と店員さんに急かされると、「お前さ」と、さっちゃんが口を開いた。

「お前、不妊治療まだ頑張っとんか？」

急にデリケートな話を振られたことにも驚いたが、仲良しとはいえ異性のさっちゃんに不妊治療の話なんかしたっけ？と戸惑った。（共通の友人のゴロに聞いたのかな？）

「一応頑張っとるけど、来年の誕生日に不妊治療は卒業しようと思っとる」と、ありのまま伝えてみる。

「そうか。旦那さんからもらった腎臓を大事にせんにゃーね」と、何かを飲み込むさっちゃん。

「さっちゃん、どしたん？」と聞くと、「いや、実はうちも不妊治療しとるんじや」とさっちゃんは無表情のままカミングアウトをした。

ここからは、一気に10代の自分たちに逆戻り。店を出るなり近くのマクドナルドに飛び込んで、「これまでどんな治療をしてきたのか」、「不妊治療をする人の心と体の痛み」について、私は妻の視点で、さっちゃんは夫の視点で語り合った。

きついね、つらいね、よくがんばってるね。私はもう諦めかけてるけど、さっちゃんの奥様は30代でお若いから大丈夫。

そんな話を一通りすれば、どんどん話がウェットになっていく。これは、不妊治療をしている当事者にしか理解できない話かもしれない。我々は、スマホを取り出して、まるで我が子の写真を見せ合うように受精卵の写真を見せ合った。

不妊治療の最終段階は、体外受精だ。体外受精をしているということは、あらゆる治療を尽くしたけれど妊娠できないのであって、体外受精を経て受精卵ができたことは、患者にとっては奇跡のようなもの。受精卵は我が子のように愛しい存在なのだ。

「ああ、この子は美しいね。いい子」

私たちは、互いの受精卵のかたちをチェックした。凸凹がなく円形状に整っている受精卵は生命力が強く、妊娠の確率が上がると医師に教わったためだ。でも、「いい子」だなんて。相手は受精卵なのにね。この妙な感覚を、誰でもないさっちゃんが理解してくれたことがうれしかった。

ちなみに、我々の話を隣で聞いていた同級生は、「ほほーこれが受精卵か。勉強になるわ」と大人の対応をしてくれた。同級生の間に、偏見はない。ただただ、仲間のこれまでと、これからを受け入れる。

結局、マクドナルドで2時間話し込み、広島弁を取り戻しつつあるところで、お開きとなった。

帰りの小田急線では、親の死の話になった。

「お前の母ちゃん亡くなったんじゃろ。実はゴーロから聞いたんじゃけど、お前が家族のこと大好きなの知ったけん、なんて言葉をかけたらいいいんかわからんで。何年も連絡できんかった」とさっちゃん。

「いやいや、さっちゃんもお父様がお亡くなりになったんじゃろ。お母様はどうしとってん？」と私。

親の死。40代になると珍しいものではなくなる。もちろん悲しい出来事だけれど、この時の文脈は悲しいものではなかった。

未熟だった私たちが親離れして、自分の道を歩みはじめたという前向きな話だった。親の死を通して互いの成長と老いを実感できる。それも生きてこそだと思えば、ありがたいものだと感謝できる。

「じゃ、またな」

先に電車を降りるさっちゃんがハラハラと手を振った。4代のおじさんになっても、笑うとやっぱりキムタクに似ていた。

文/もろずみ・はるか

ライター・医療コラムニスト

広告制作会社を経て2010年に独立。中学1年生の時に慢性腎臓病を発症。18年3月、夫の腎臓を移植する手術を受けた。

- ・連載 (ウートピ) https://wotopi.jp/archives/cat_summary/kidney
- ・連載 (yomiDr.) <https://yomidr.yomiuri.co.jp/column/jinzou-morozumi/>
- ・YouTube <https://www.youtube.com/channel/UCyAM15SCKtBfsqTxk7HTbhA>
- ・ラジオ <https://885fm.jp>